

死後の世界は永遠に

double quarter

「なんてことだ。まさか死後の世界が実在するなんて」

ここが死後の世界だとうまく認める気になって、私はそんな独り言を言った。現世に置いてきた彼らとの賭けは負けだな、なんてくだらない記憶を思い出していた。

少し時を戻そう。私は理想的な老後を送っていた。家族にも好かれ、同じく老後の友人も多い。結局年金はほぼもらえず、少し貯金が少ないことだけをさやかな悩みとしていた、至って平凡な老人だ。

しかしどんな人にも死は平等に訪れる。例に漏れず迫る死の気配を私もなんとなく察していた。とはいえこの歳になるともう死を受け入れる心の準備はできていた。歳を取ると死を受け入れる準備が段々できていき、あまり恐怖を抱かなくなるといえるのはよくあることらしい。私もその通りで死への恐怖は気付けば薄れていた。

娘はいつの間にか大きくなり、結婚し、今度は娘が子供を産んだ。孫は当然可愛い。しかしそれ故生に執着するということも不思議となかった。死は人にはどうすることもできないものだ。どうすることもできないものに頭を悩ませるくらいなら、目の前の日々を大切にしたい、そんな考えだった。

友人と話すことも多かったが、健康の話や孫の話に加え、たまに死の話をすることもあった。表面上だけかもしれないが、友人も皆それほど死は

恐れていないようだった。だが死についての考え方は人によって少し違っていた。極楽、天国や地獄を信じている人、私のように死後の世界は無いと信じている人、様々だった。

お互いを否定するほど血気盛んではなくなっていたが、何もしないのもつまらないということで賭けをすることにした。私は死後の世界がない方に賭けた。もし死後の世界があったら、そこに何があるかわからないが、何らかの便宜を図ろうという曖昧なものだ。これでは死後の世界があってもなくても私には得がないじゃないか、ということに気付いたのはその日の夜に妻と二人で夕飯を食べていたときのことだった。

そんな日々が続いて何年になったか。私に急に死が訪れた。散歩から帰って、昼食ができあがるまで時間があるから少し昼寝でもしようかとソファに深々と腰掛けたその約十分後、私は死んでいた。老衰だった。

しかし死んだときの状況は残った記憶から推測したものでしかない。ソファに腰掛けたことまでは覚えていたが、気付いたらこの死後の世界としか言い様がない場所にいたからだ。

もちろんこれが夢じゃないとは言い切れない。私もここが死後の世界だと認めるまでは時間がかかった。私は夢だと気付いたら夢から覚めることができる特技があつたから、それができない以上夢じゃないと直感で思った。それならばあの後倒れて麻酔か何かの影響下にいるのかとも思ったが、それにしては意識がはっきりとしすぎている。夢の世界だと時間感覚がおかしくなるという話も聞くが、それにしただって寝ている状態が長すぎる。これだけはっきりとした意識があつて、何万秒と時間を数えていたのに全く覚める気配がないのだから、少なくとも普通の状態ではない。

肉体はあるが、なぜか若いときの姿のようだ。顔は見えていないが手や肌  
の感じがそうだ。一番印象に残っている時期の自己イメージが投影されて  
いるのかもしれない。

周囲の様子は白っぽく光に包まれているが、太陽のようなものは見当た  
らない。私は宗教にはあまり詳しくなかったので断言できないが、まるで  
様々な宗教の平均的な天国（あるいは死後の世界）のような印象を受ける。  
建物はないが、周囲を漂っていると（歩いているというより漂っているイ  
メージが近いのでこう表現したい）、草木や池のようなものがある。いか  
にも天国という感じだ。

山なんかはないのだろうかと少し風景に物寂しさを覚えていると、いつ  
の間にか山のようなものが見えるようになっていた。最初はそのことに驚  
きを覚えたが、そんな風に急にイメージしたものが現れたり消えたりする  
のにもそのうち慣れた。夢の中のように、自分のイメージで変わってくる  
世界のようなだ。

やっぱりこれは夢なんじゃないかと思いついていたときのこと、決定的  
なことが起こった。他者との交信だ。これは会話ではなく交信と言うべき  
ものだった。その存在は姿を見せないまま近づいていたらしく、私には急  
に話しかけてきたように感じられた。だが不思議とそれに驚きや恐怖はな  
かった。

「こんにちは。あなたはここにきてどれくらいなのかな？」

頭の中に直接話しかけられているような感じだった。それを受けて私は  
自分も同じことができるかと気付いて焦るようにこう問いかけた。

「こんにちは。ここはどこですか？ あなたは何かを知っているのです  
か？」

「質問は一つずつにして欲しいな。そう焦らなくても知っていることは話  
すよ。質問に答えて欲しかったが、その様子だとまだ来てすぐという感じ  
だね」

あまりの状況に混乱していたとはいえ、私は不躰だったと少し反省した。  
「それなら実体があった方がやりやすいかな。僕は今あなたの前にいるは  
ずだ。そのことを強くイメージして、どんな体でもいいから僕に実体を持  
たせるんだ」

言われてイメージする。さつき山を出したのと同じことだ。理由は自分  
でもわからないが、なんとなく小学校のときの担任の先生の姿が浮かん  
だ。三十歳くらいの男性で身体は細いが目は鋭く、それでいて優しい印象を受  
ける人だ。

「僕からはわからないけど、上手くいったのかな。それじゃあ混乱してい  
ることだろうし、ひとまずあなたの質問に答えようか」

先生のイメージに魂が入り、生きているかのように目の前で話し始める。  
私は少し落ち着きを取り戻し、今度はこの人に聞くしかないという縋り付  
くような気持ちになった。

「まずここはどこですか？」

「わかりやすい言葉で言くと、ここは死後の世界かな。死んだ後に意識だ  
けがたどり着く場所」

やはりそうなのか。

「私の夢じゃないことは確かなのですか？」

そう言くと彼は少し考え込んだ。

「あなたは数学の素養がありますか？ あなたが知らない、思いつきもし  
ないような知識を私が持っていればきっとそれはあなたの閉じた意識の

中じやない証明になると思う」

「大体忘れてしまいました。でも高校で習ったことならわかります。娘に教えたことがありましたので」

なら良し、とばかりに彼はつらつらと数学の定義や定理を羅列していく。それが全くのたためでないとわかる程度の内容でもあった。そして私にはとっさに思いつきような内容であることもわかった。

「もう大丈夫です。感覚としてはそんな気はしていましたが、頭でも理解できました。ここが私の夢の中なんかでなく、死後の世界だということ」その感慨に浸る隙もなく、次々と疑問が浮かんできた。

「ここは何の場所なんですか？ 一体何をすれば良いんですか？」

「質問は一つずつ……と言いたいところだけどその二つの問いは非常に密接しているね。この場所には目的なんてない。そもそも現世でも目的なんてものは実は幻想でしかないんだけどね。ここにはただ意識が存在して、ただ自分やお互いを認識している。終わりはない」

「終わりが……ない？」

その言葉は私を動揺させるに十分だった。私は死とは終わりのことだと信じていたから死を受け止められていたのだ。まさか永遠にこのまま漂い続けるのか？ それだけは嫌だった。

「最初はそう思うだろう。でもそんなに悪いものでもないよ。肉体を持っていたときの記憶が薄れればいずれそう思えるようになる。まあそれしか選択肢がないから良し悪しも何もないけどね」

そう言われても私の気持ちは落ち着かなかった。その様子を察したのか、彼は気遣わしげな顔をした。

「まあ最初はそんなもんさ。あなたは現世の記憶が強いから特にその動揺

が大きいんでしょう。一人でしばらく考えてみると良いよ。そろそろ僕もすることがあるし」

「行ってしまうんですか？」

「寂しいかな？ でも意識は僕以外にも沢山いるから、君が注意すれば決して孤独ではないとわかるはずだよ」

そう言うて去ろうとした背中——そう肉体をイメージしていたからではあるが——を呼び止める。

「待ってください。あなたは一体何者なんですか？ 仏様？ 神様？ 名前は何？」

そう聞くと彼は少し悲しそうで、でも不思議と嬉しそうな、不思議な微笑をたたえた。

「どれでもないよ。僕は多分元々君と同じ人間で、今はただの一つの意識だよ。名前も生きていた頃の記憶も、ほとんどなくなっちゃったけどね」

それから意識として漂い、イメージし、他の意識と交信する方法などをなんとなく練習していた。イメージによつて音や匂いや味なんかも感覚でできるようになった。イメージすれば何でも作れるが、今となつては慰めにもならない。だがこうしてしばらくこの世界で漂っていると、不思議と永遠への絶望感や焦燥は消えていくのを感じる。最初に会った彼に言われたとおり、意識だけで存在していれば案外永遠とは苦痛ではないのかもしれない。……もしかしたら長い時間を経て麻痺していくだけかもしれないが、事ある毎に他の意識と交信しようとしていたが、これが意外と上手いかなかった。意識がそこに存在している感覚があるのに、話しかけても何

も返事が返ってこないのだ。意識と似ているが意識ではない存在があるのかもしれない。あるいはそれがこの世界での死なのかもしれない。

たまに私と同じようなこの世界に入りたての状態の意識と出会ったが、彼らのもつ知識は私のそれと大した違いがなかった。最初に出会った彼のような状態の意識は珍しいようだ。

その頃には人っぽい肉体をイメージせずとも、意識体同士で交信することに慣れていた。自分の肉体のイメージもいつの間にか消えていた。

そんな暮らしを続けて何ヶ月、いや何年が経ったのかわからないが、転機があった。私は現世の記憶のせいなのか、永遠の呪縛から逃れたいという思いは消えず、そのための手立てがないか考えては試し続けていた。

私の周囲に意識はいなかったはずなのに、急に近くの意識が話しかけてきた。

「君はもしかして諦めていないのかな」

驚きつつも返事をする。

「完全なる意識の消滅を諦めていないのか、という意味ならその通りです。ところで私は周りに意識がいらないと思っていたのですが、どういう仕組みですか？」

目の前の彼はピンとこないようではらく考えていたが、すぐ納得してこう返した。

「ああ、君はこれらが意識ではないと思っっているんだね」

彼は周囲に多数存在する返事をしない存在を指してこう言った。

「みんな意識だよ。たとえそう見えなくても、彼らはこうしている間にも意識を持续けている」

そう、彼らは私と同じ意識だったのだ。

詳しく聞いてみると、彼らは瞑想をしているのだそうだ。正確には瞑想ではないのかもしれないが、瞑想と言うのが一番近いものだ。きつと長い年月を過ごし、たどり着いた最適な形がこの状態なのだろう。周囲の意識からの情報をシャットアウトし、自身もひたすら何も考えず存在し続ける。そこにたどり着くまでの途方もない時間と、そこに到達しても永遠に終わらない意識というものを間近に感じてゾツとした。

彼もまたその瞑想中の意識の一人だったのだが、あえて完全な瞑想をすることなく外界を認識し続け、私のような永遠を打破する志を持つ者を待っていたのだそうだ。みんなこの世界から逃れたいと思っているのではないかとばかり考えていたが、どうやらそうではないらしい。私のように長い時間その意志を保ち続けている意識は珍しいとのことだ。

「さて、私の意向を伝える前に君の疑問を解消しておこう。いくつか思いついている死の方法はあるだろうが、無駄な努力はさせたくないし、知っておいた方が色々考えやすいだろうしね」

聞きたいことは山ほどあった。果たして彼が知っていることが全て正しいのかはわからないが、何かしらのヒントにはなるはずだと思った。

「この状態からさらなる死はないのですか？」

「ないはずだ。私も他の意識も多少なりとも自身や他人に危害を加えるということができた試しはない。体感で数千年生きてきたが一度もね。もっともできていたら我々にそれを伝える術はないわけだが。少なくとも知り合いでそれを達成したと確信できる者はいないよ」

「では一時的に意識を失う、眠りや気絶に当たるようなものはないのですか？」

「眠りか、懐かしいな。残念ながら一時的にも意識を消せたことはないよ。君も試したと思うけどね」

やはりそうか。直感していたことではあるが、普通の方法では意識の消滅は不可能、もしくは気が遠くなるほど困難らしい。すると次に気になるのはこの世界のことだ。

「同じ土地で死んだはずの知り合いに会えていないのですが、私が死んだところの近くにいますはずではないのですか？」

「それに答えるためにはこの世界についてもう少し詳しく説明する必要があるな」

そう言って彼は説明を始めた。

この世界はいわゆる多次元空間のようなもので、意識には認識できない次元方向への移動も勝手にされることがあるのだそうだ。紙の中に閉じ込められた存在が立体の世界を認識すらできないのと同じだ。そのため現世では物理的に近いはずでも知覚できない次元方向に異なる領域に存在している可能性が高いらしい。しばらく近くにいた意識が気付けばどこにもいなくて認識できなくなっている、という経験を繰り返したことで立てた仮説だそうだ。

せっかく死後の世界があるんだったら自分の両親や先に死んだ友人に会いたかったが、それも叶わないか。それは死後の世界がそもそも存在しない場合よりも、かえって悲しいような気がした。

現世へも似たような次元の隔たりがあって行けないのだろう。そもそも現世と死後の世界が別ものかどうかすら怪しいのだが。意識だけなら肉体の制限を受けないから、高次元への移動ができてもおかしくないと言われたが、それなら高次元を認識することも可能にして欲しいと文句を言い

たいところだ。

「もしかしたら完全に肉体の記憶を捨てれば高次元も認識できるのかもされないけどね。その場合肉体の記憶から来るこうした消滅への欲求も消えているのだろうか？」

「肉体の記憶とおっしゃっているそれは何ですか？」

「そもそも生前我々が意識だと思っていた脳活動というものは意識のごく一部に過ぎなかったと考える必要がある。確かに物理的実体として意識の存在を担っているのは脳だが、意識というものはそれだけではない。精神活動として肉体とは切り離された記憶や思考とされていた現世のそれらも、その意味では純粋な意識の活動ではなかったと言えるんだ。平たく言えば、肉体がある状態での精神活動の結果が、肉体の記憶として意識だけになった我々に残っているってこと」

「……わかるようなわからないような」

「そんなもんだよ。まあ数百年も過ごせば感覚としてわかるようになるんじゃないかな」

数百年、その長い年月がサラッと出てきてしまうことにもう薄れていたはずの恐怖を感じた気がした。だが同時に納得感もあった。彼の佇まいは長くて百年程度しか生きられない人間のそれとは決定的に異なっていた。それを受けて、もう一つ聞いてみたいことが浮かんできた。

「数千年生きてきたっておっしゃってましたけど、どうしてそれで正気でいられるんですか？」

「んーなんというか、本質的に発狂という状態は純粋な意識においては存在しないんだ。まだ日が浅いから君は感覚的にはわからないかもしれないけど。結局精神的な苦痛だと思っていたものも広い意味では肉体にとらわ

れて発生していた苦痛でしかない。脳は純粋な意識ではないという話を今さっきしたけど、そのことだ。純粋な意識はその種の狂気を本質的に寄せ付けない。もっとも残留した肉体の記憶によって似た苦しみが生じることもあるけどね」

なんだかさつきよりよくわからない話だ。

「それなら私もさつきと諦めて瞑想に入った方が良いでしょうか？」

「それはどうだろうね。私はその結論を否定も肯定もしないよ。そもそも純粋な意識のみの状態において価値や意味や目的なんてものは存在しないからね」

「ならどうしてあなたはこうして消滅するための方法を探し続けているんですか？」

「自分でも時間があつたから考えてみたんだけど、やっぱり肉体の記憶のせいだと思うんだ。私や君みたいに、なぜだか生前の記憶や人格や感覚が強く引き継がれてしまう場合がある。もしかしたら死の直前の意識がはっきりしているほど記憶が安定するのかもしれない。ともかく生前の感覚で永遠に対して恐ろしさを感じていた場合、それが状態良く引き継がれてしまうと純粋な意識を乱してしまうと考えられる。こっちで過ごす時間が長ければ薄れていく感覚だと思うけど」

「それではあなたは私たちの方がおかしいと？」

「おかしいかどうかは絶対的な概念じゃなくて相対的な概念だよ。ここらにいる意識の大多数からしたらおかしいかもしれないけど、現世の人からしたら私たちの方がまともに見えるだろう」

どこか答えをはぐらかされた気がしたが、それでも真つ当な意見なのは確かだった。

「……どうしてそんなに知っているんですか？」

「厳密には知っているとは言えないのだけどね。ただひたすら考えているのさ、完全に消滅するための方法を。もう気が遠くなるほどの時間をそれに費やしてきた」

それを聞いて一通りの疑問が尽きた。その様子を見て取ったのか、今度は彼が本題に入った。

「それで、君は果たして私に協力してくれるのかな？」

「ええ、気が変わらないうちはそのつもりです」

「そうだね、私とていつ気が変わるかわからない。その辺のことは一々断らなくていいよ。それと次元移動についてだけど……」

すっかり忘れていた。次元をまたいでの移動が起こってしまったらどうしようもなく離ればなれになる。おまけにそれは制御できないと来た。

「どうすれば良いでしょうか？」

「正直に言うとうとうしようもない。だが本当にどうしようもないわけじゃない。こうして出会える場所にいる場合は、移動したとしても比較的近くにおいて、会える確率も高いということがわかつている。別れてももう百年くらいすればまた会えるものさ。そういうことを繰り返してきた。何、君もそういう知り合いが増えれば常に同じ領域に誰かしらいるはずだ」

「そういうものですか？」

「そういうものだ」

相変わらず不安は癒えなかったが、こうして仲間ができたというのは心強かった。何か目的があるうちは正気でいられるものだ。いや、純粋な意識はそもそも狂気とは無縁だったか。

それからの日々はもう気が遠くなるくらい長かった。ひたすら意識体の操作の練習をして何か抜け道や自傷の方法がないか探したり、今度は逆に自分が現世から来た人にこの世界のことを教えたりもした。言われていた通り、私たちのように肉体の記憶がはつきりしている者は少なかった。

彼と最初に次元に隔てられてしまった時は動揺したが、それは三回も繰り返せば気にならなくなった。そもそもそうした巨大な時間スケールで生きるようになったというのもあるし、意識の消滅を目指す意識たちの知り合いが増えて寂しくなくなったというのもある。彼らと会うたびに彼らの存在がどれだけ珍しいかを実感した。ほとんどの意識は皆瞑想状態だった。

意識を消滅させる方法は、意識への自傷か融合が有力だった。しかし意識への自傷は到底できそうもなかった。夢の中で怪我をしても当然それは現実には反映されないように、意識は常に完全なままで在り続けた。

意識を他人と融合させることで擬似的に自我を消す方法も考えられてはいた。しかし深い感覚の共有はできても、自我はそれぞれはつきりしたままだった。

意識とは思考であるのだから、思考をできるだけ減らすことで限りなく死に近づくことができる、と考えた者もいたが、直後それが瞑想だとすぐに気付いた。中にはそのまま瞑想のその先を目指そうとする者もいたが、華々しい成果を上げた者はいなかった。

皆この先には何かあるかもしれないと思って奮起するものの、そんな「かもしれない」だけで何百年も続けられる者ばかりではなかった。一人瞑想に消えてはまた一人現世から来て増える、その繰り返しだった。

気付けば恐らく数千年は優に経ったであろう感覚があった。そこに果たして何回感情の波があったのか、もう覚えていない。時々諦めようとも思ったが、諦めた先なんてないことに気付いて必死に気持ちを保ち続けて来た。だがそれももう限界だった。

いや、限界という表現は適切ではない。私はきつとこの世界に適応したのだ。もはや意識を消滅させたいという欲求はほぼ消えていた。ただ、残してしまう彼らには申し訳なさを感じた。

偶然にも、そのとき同じ領域に彼がいた。私に意識の消滅という目標を与えてくれた存在だ。長く生きた意識に名前は無いが、識別は可能だ。

彼にも申し訳ないと思うが、それと同じくらい、なぜ彼はずっと瞑想の終わりを認められないのだろうかと思議でもあった。しかしそう思える感覚も私にとってはたったここ数百年のものであったことを思い出して、自嘲的に笑った。

「やっぱり君も諦めてしまうんだね」

「ごめんなさい。でも私ももう純粋な意識になりつつあるみたいです」

「それが悪いことだとは思わないよ。それにこういうのはもう見慣れた。なんだか君たちが羨ましいような気さえするよ」

「……『そもそも純粋な意識のみの状態において価値や意味や目的なんてものは存在しない』。だから私たちの状態の方が良いなんてことはない、そうですよね？」

いつの日か聞いた言葉を思い出していた。それは気付けば生前の記憶より鮮明に刻まれていた。あの日が意識体としての私のスタート地点だった

のかもしれない。

「君の言うとおりだ」

彼はそう言つて笑つた。

これまで過ごした年月の長さに反比例して、交わすべき言葉は少ない。全て語り終えた、そう感じられる。

「それじゃあ、おやすみ」

私はついに瞑想状態に入る。長い意識体での生活の末、既に完璧な瞑想に入る準備はほぼできていたようだ。

これから思考を限りなく排しながらも一秒一秒を感じ続け、永遠と添い遂げるのだ。完璧でない以上たまに意識してしまうことだろう。それがたとえ一日に一分でも一秒でも、無限の日数があるなら意識してしまう時間は足し合わせれば無限には変わりない。だから本当は考えないことなんて必要じゃなくて、ただひたすら受け入れ続け、意識を限りなく純粹にしていくことが重要なのだ。だからこれは瞑想という名前だが、瞑想とは少し違うものだ。

そうして私は肉体の記憶を手放した。